

○地域貢献研究 T-4

研究課題

茨城における地域在住障がい者に向けたスポーツプログラム運営の組織化に関する研究

○研究代表者 作業療法学科 教授 堀田和司

○研究分担者 理学療法学科 准教授 橘 香織

(5名) 一般社団法人日本車椅子バスケットボール連盟 石田 菜月

医療法人晴生会 介護老人保健施設桜の郷祐寿苑 小柳 明世

理学療法学科 嘱託助手 愛知 裕子

付属病院理学療法科 久保田 蒼

○研究年度 平成28年度 (研究期間) 平成27年度～平成29年度(3年間)

1. 研究目的

研究代表者らは2011年度～2014年度地域貢献研究において、地域在住障がい者が利用可能なスポーツプログラム(IBARAKI Sports for Everyone!; 略称ISEプログラム)を開発した。このプログラムは本学体育施設を利用し、在学生・卒業生がスポーツボランティアとして参加して行うものである。利用者にとっては車いすに乗ってスポーツをする機会の創出、大学にとっては人材と施設を生かした地域貢献、そして在学生・卒業生にとってはスポーツボランティア活動を通しての人間形成、と参加・関与するいずれの立場においてもメリットがある活動を目指している。

研究代表者らはこれまでの研究において車椅子バスケットボールを中心に定期的にISEプログラムを実施し、参加者にとって心身の健康増進効果があることを示してきた(橘, 2013)。ISEプログラムをしっかりと地域に定着させより多くの方に利用していただけるものにするための次の課題としては、受け入れる側のスタッフの人数の増加ならびに質的向上を図り、多くの参加者を受け入れ可能にするための組織としての発展を目指すこと、そして、地域の中で車椅子を利用したスポーツプログラムに対してどのようなニーズがあるのかを把握し、そのニーズに応えられる多様なプログラムコンテンツを育てていくこと、の二点があると考えている。

そこで、本研究の目的は、ISEプログラムの運営の充実を図るために、①スポーツボランティアとして活動するスタッフの質的向上ならびに活動継続に必要な要因を検討すること、そして②茨城県においてどのような障害者向けスポーツプログラムへのニーズがあるかを明らかにし、自治体や教育機関と連携して障がい者スポーツの普及・発展を推進する組織づくりの基盤を構築することである。

【スポーツボランティアとして活動するスタッフの質的向上ならびに活動継続に必要な要因の検討】

2. 研究方法

1) 対象

ISEプログラムの中でも最も利用者の多い車いすバスケットボールを行うプログラムである「車いすバスケットボールビギナー教室(以下、車いすバスケ教室)」にコーチングスタッフとして参加した18名(他大学の学生を含む大学生スタッフ7名、社会人スタッフ11名)を対象とした。

2) 方法

地域在住障がい者とその家族39名を対象とした車いすバスケ教室を2016年4月-7月の間の土曜日で春クールとして計10回、同年9月-12月の間の土曜日で秋クールとして計10回、合わせて年間で20回の練習会を実施した。今年度は参加希望者が昨年より大幅に増えたため、運動能力や本人の希望などを考慮し、ツインバスケットボールと車椅子バスケットボールの2つのクラスに分けて実施した。スタッフの業務内容としては、①事前準備として毎週事前に実施したミーティング(前回実施時の振り返りをもとに次回の練習内容の確認と役割分担)への参加、②当日の業務として車椅子や道具の準備、参加者の体調チェック、車椅子への移乗介助、技術指導や活動サポート、ゲームコーチング、審判、終了後の体調チェック、後片付け、③クラス終了後にその日の反省や振り返り、であった。また、これらのほかに、春クール開始前、春クール終了後、秋クール終了後に、主にコミュニケーションスキルと目標設定に関する全体スタッフ研修会に参加させた。

この車いすバスケット教室にコーチとして参加したスタッフを対象に、春クール開始前、春クール終了後および秋クール終了後に、田引(2005)をもとに作成した「スタッフとして参加することによる成果として期待すること(12項目)」「スタッフとして参加する際に不安と感ずること(13項目)」についての自記式質問紙調査を実施した。各尺度項目については、5件法で測定し数量化した。なお、本研究の発表に際し、参加スタッフには研究の趣旨と内容、および記録の取り扱い方法について説明し、記録内容の公表について同意を得た。

3. 結果

2016年度の車いすバスケット教室への参加者は、茨城県内外から40名が参加登録し、20回の練習会で参加した人数は延べ672名であった。年度途中で参加が困難となった1名を除く17名分のスタッフについて質問紙の結果を検討した。車いすバスケット教室に参加することで期待する成果について、開始前と終了後で最も差があったのは「所属感を得られる」という項目であった。一方、開始前調査でスタッフの多くが不安と感ずていた項目は「問題が生じた時の対応」「自身の知識や技術の不足」「仕事に対する責任」「家族への対応」「仕事と勉強との両立」であった。これらの項目に関しては終了後も得点の減少が見られなかった。自由記載の内容と合わせて検討すると、スポーツ指導に必要な知識(障害について、競技そのものについて、など)の習得やコーチングスキルの向上、リスクマネジメントに関する研修の必要性を感じたという意見が聞かれた。

4. 考察

今回の結果から、スタッフが安心して、かつ自信を持ってスポーツ指導に当たることができるようにするためには、コミュニケーションスキルの研修のみならず、参加者の基礎疾患や障害特性に関する知識、競技そのものに関する理解、さらにはアクセシビリティや家族からの要望に応えるための対応力、といったものを高めるためのサポートが必要であることが示唆された。今後、障がい者スポーツの普及を図る上で、競技人口を増やすためには技術指導や活動サポートができるスタッフ数も同時に増やしていくことが必須であると考えられる。医学的知識を基盤に持った医療専門職は障がい者スポーツ普及プログラムに関わる人材として適しており、彼らを対象とした障がい者スポーツボランティア養成プログラムの作成は意義深いものと考えられる。3年目の最終年度は人材育成研修プログラムの作成を進め、その効果を検証していく予定である。

【茨城県における障がい者向けスポーツプログラムへのニーズ】

2016年度は茨城県内の2つの特別支援学校から車いすを使ったスポーツ体験プログラムの実施を依頼された。また、茨城県内の特別支援校教員を対象とした研修会、および、茨城県内のリハビリテーション専門職(PT・OT・ST)を対象とした研修会を実施した。これは学校現場や病院・施設においても障がい者スポーツを取り入れた活動実施への関心の高さを示すものと考えられる。学校や病院・施設は障がい者スポーツの入り口として重要な存在であるため、学校教員やリハビリテーション専門職に対する研修活動プログラムの充実も図りたい。

5. 成果の発表

- 1) 齊藤まゆみ, 橘香織. 競技スポーツと練習環境. 体育の科学, 67(1);45-49, 2017
- 2) 久保田蒼, 高橋一史, 佐野久美子, 大橋ゆかり, 橘香織. 当院利用者を対象とした車椅子スポーツ活動導入の試み - 活動参加による入院患者の心理的影響 -. 茨城県立医療大学附属病院研究誌ひろき 19;31-36, 2016.
- 3) 石田菜月, 堀田和司, 愛知裕子, 小柳明世, 久保田蒼, 橘香織. 障がい者スポーツに関わるボランティアスタッフの参加動機に関する研究～車椅子バスケットボール教室の運営を通して～. “アダプテッド/医療/障がい者”体育・スポーツ合同コンgresin北海道(2016年7月 北海道岩見沢市)
- 4) 小柳明世, 石田菜月, 愛知裕子, 久保田蒼, 橘香織. 車椅子バスケットボール初心者プログラムに参加する地域在住障がい児・者へのアンケート調査. “アダプテッド/医療/障がい者”体育・スポーツ合同コンgresin北海道(2016年7月 北海道岩見沢市)
- 5) 愛知裕子, 堀田和司, 石田菜月, 小柳明世, 久保田蒼, 橘香織. 車椅子バスケットボール初心者プログラムに参加する地域在住障がい児・者へのアンケート調査. “アダプテッド/医療/障がい者”体育・スポーツ合同コンgresin北海道(2016年7月 北海道岩見沢市)

6. 参考文献

- 1) 橘香織, 石田菜月, 相楽未由樹, 久保田蒼, 金井欣秀, 青柳亜希, 齋藤由香, 六崎裕高, 和田野安良, 水上昌文. 車いすバスケットボール初級教室への参加が障がい児・者の身体機能及び競技パフォーマンスに及ぼす影響. 茨城県立医療大学紀要(18) p.25-32, 2013.
- 2) 田引俊和, 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究, 医療福祉研究 (1) p85-93, 2005